



# 第 1 日

## 国 語

( 9 : 3 0 ~ 1 0 : 2 0 )

### 注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて 6 ページあり、問題は一から三まであります。これとは別に解答用紙が 1 枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第 番
------	-----

一 次の文章には、太郎が通う絵画教室の先生である「ぼく」が、太郎に心から表現したいものを見つけさせたいと考え、太郎を川につれていつたときのことが描かれています。この文章を読んで、との間に答えなさい。

広い空と水のなかでひとりの男がシガラミをあげたり、おろしたり、

いそがしく舟のなかでたち働く姿が小さくみえた。ぼくは太郎をつれて堤防の草むらをおりていった。「あれは魚をとつてるんだよ。」「……」  
「こんな大きな川でもウナギやフナの通る道はちゃんときまつて  
いるんだ。だからああして前の晩にシガラミをつけておくと、魚はこり  
やいい巣があると思つてもぐりこむんだよ。」

橋脚だけのこされたコンクリート橋のしたでぼくと太郎は腰をおろし  
た。橋は戦争中に爆撃されてからとりこわされ、すこしはなれたところ  
に鉄筋のものがシンセツ①された。強烈な力の擦過した痕跡は、いまは  
のこされたコンクリート柱だけで、爆弾穴は葦と藻に蔽われた、静かな  
池にかわっていた。太郎は腰をおろすと、絵の具箱を肩からはずし、ス  
ケッチ・ブックをあけようとした。ぼくはその手をとどめて、右の眼めを  
つぶつてみせた。「今日は遊ぼうや。カニでもとろうじゃないか。」ぼ  
くはそういうてたちあがると、葦の茂みのなかへ入つていった。

葦をかきわけて歩くと、一足ごとに、泥がそのまま②ナガれるのでは  
ないかと思うほどおびただしい数の川ガニが 。ぼくは太郎  
といつしょに彼らをつかまえたりした。はじめのうち太郎は泥がつくこ

とをいやがつていたが、そのうち靴にしみが一点ついたのをきつかけに、  
だんだん大胆に泥のなかへふみこむようになつた。カニを追うたびに彼  
の手は厚く温かい泥につきさり、爪は葦の根にくいこんだ。やがて彼  
がひとりで小さな声をあげつつ茂みのなかを這はいまわりはじめた頃ころをみ  
はからつて、ぼくはあたりに水たまりがないことをみとどけ、もとの爆  
弾穴のほとりへもどつた。

ぼくが葦笛をつくることに没頭していると、しばらくして太郎が手から水をしたたらせてもらひてきた。彼は足音をしのばせつつやってくると、ぼくのまえにたち、青ざめて「先生、コイ……」そういつたままあえいだ。「どうしたんだい？」「コイだよ、先生。コイが逃げたの。」  
彼はぬれた手でいらだたしげに額の髪をはらい、ぬき足さし足で池にもどつていった。そのあとについていくと、彼は水辺でいきなり泥のうえに腹ばいになつた。ぼくは彼とならんで葦の根もとにねそべり、おなじように池のなかをのぞきこんだ。ぼくの腕のよこで太郎の薄い肩甲骨がうごいた。彼は温かい息をぼくの③ミミの穴にふきこんだ。「あそこへ逃げたんだよ。」彼のさしたところには厚い藻のかたまりがあつた。それは糸杉の森のように水底から④スイチヨクにたつていた。日光が水にすきとおり、森の影は明るい水底の砂の斜面におちていた。たしかにこの水たまりの生命はその暗所にあるらしかつた。さまざま小魚や幼虫や甲虫類が森をかきわけて砂地の広場にあらわれると、しばらく日なたぼっこして、また森の奥へもどつていくのがみえた。

ぼくは太郎といつしょに息を殺して水底の世界をみつめた。水のなか

には牧場や獣林や城館があり、森は気配にみちていた。池は開花をはじめたところだつた。水の上層にはどこからともなくハヤの稚魚の編隊があらわれ、森のなかでは小魚の腹がナイフのようにひらめいた。ガラス細工のような川エビがとび、砂のうえではハゼが楔形文字を描いた。ぼくは背に日光を感じ、やわらかい風の縞<sup>しま</sup>を額におぼえた。

池の生命がほぼ頂点に達したかと思われた瞬間<sup>2</sup>、ふいに水音が起つて、ぼくは森に走りこむ影をみた。<sup>2</sup>ハヤは散り、エビは消え、砂地にはいくつものけむりがたつた。影の主の体重を示して森の動搖はしばらくやまなかつた。ぬれしよびれた顔を水面からあげて、太郎はあえぎあえぎつぶやいた。「逃げちやつた……」茫然として彼はぼくをふりかえつた。彼の髪は藻と泥の匂<sup>にお</sup>いをたて、眼には熱い混乱がみなぎつていた。そのつよい輝きを見て、案外この子は内臓が丈夫なのではないかとぼくは思った。空氣には甘くつよい汗の香りがあつた。

(開高 健 「裸の王様」による。)

①～④のカタカナにあたる漢字を書きなさい。

1 □<sup>1</sup> にあてはまる最も適切な語句を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 同時にとまつた イ 互いにくつづいていた

ウ いつせいに走つた エ それぞれじつとしていた

3 □<sup>1</sup> 池は開花をはじめたところだつた。とあるが、これは、池の中の

どのような様子をたとえた表現ですか。その様子を具体的に述べてい

る適切な部分を文章中から抜き出し、そのはじめの五字と終わりの五字を、それぞれ書きなさい。

4 □<sup>2</sup> ハヤは散り、エビは消えとあるが、ハヤが散り、エビが消えたのは、どのようなことがあつたからですか。二十五字以内で書きなさい。

5 □<sup>2</sup> 池の中を見ているときのぼくと太郎の様子で、音をたてないようにしている一人の様子がうかがえる語句があります。それを文章中から五字で抜き出して書きなさい。

6 □ 次の文章は、コイに出会つたあとの大太郎に対するぼくの見方について述べたものです。空欄Ⅰにあてはまる適切な表現を二十字以内で書きなさい。また、空欄Ⅱにあてはまる最も適切な語句を、あとの大太郎の中から選び、その記号を書きなさい。

太郎はコイを見つけた池にもどり、( I ) という行動をとつた。それは、はじめに泥がつくことをいやがついていた太郎の行動とは対照的なものであつた。その後、二人で池の中を見ていたときにはコイが逃げ、太郎は茫然としてぼくをふりかえつた。そのときの太郎の眼を見たぼくは、太郎の心が( II ) いることを感じ、太郎の中に隠れていた強い生命力に気づいた。

ア 沈んで イ すさんで ウ 高ぶつて エ 安らいで

## 二 次の文章を読んで、あとで問い合わせに答へなさい。

何のために論文は書かれるのか。その目的は大きくいって一つ。一つには「自分」をつかむため、もう一つは「他者」に考え方を伝えるために、人は論文を書こうとするのである。

たとえば、イイタイコトが自分のなかにもやもやしているのだが、どうもじょうずに言葉にできない、ということがある。そういうときに、日記やノートに文字にして書きつけてみると、だんだんはつきりしてくる。論文が書かれるのも、一つにはそのためだ。つまり自分のなかのものもやもやしたことを明確<sup>1</sup>にするために書かれるのである。あいまいだつたり錯綜<sup>さくそう</sup>したりしている考え方やイメージを書くことではつきりさせ、自分のなかをすつきりさせたいから、書く。「論文」というといかめしいけれど、もともと、私たちが日記に言葉を書きつけるのとそれほど違わない。

ところで、そうやって日記に考え方を書きつけていくと、「これってちよつと勝手な考え方だなあ」とか「やっぱりこれでいいんだ」と思うことがある。つまり浮かんできた考えに違和感を覚えたり、深く納得したりし始めるのだ。こうしていくのまにか考え方を吟味・検討する自問自答の作業が始まることになる。私たちのはなぜ、そんなことをするのだろう。そのまま論文になるのである。私たちのはなぜ、そんなことをするのだろう。それはおそらく、納得できない考えには従<sup>2</sup>いたくない、自分は自分らしく生きたい、と思つてゐるからだ。他人から与えられたままではなく

て（私たちのなかに浮かぶ考え方の多くが他人の考え方のコピーなのだ）、自分でちゃんと考へて納得したい。そのため、私たちは論文を書いて自問自答してみるのである。

このように論文は、何よりも「自分の納得」のために書かれるものだ。しかしながら、論文は他人を説得する（他人を納得させる）ためにも、書かれるのである。

私たちは、自分の考え方を他人にわかつてもらいたい生き物である。だが、これが難しい<sup>1</sup>。それが自分のなかで「大切なこと」であればあるだけ、うまく伝えるのは難しい。<sup>3</sup>懸命<sup>じゅんめい</sup>に話してみても、イイタイコトの芯<sup>じん</sup>の部分がどうしてもわかつてもらえないことがある。また、私たちが何かを言うとき、親しい友人ならわかつてくれるかもしれない。でも、そうでない人はなかなかわかつてはくれない。親しい人でなくとも考え方をきちんと伝える方法はないか。そういうとき、「書く」という方法がある。書くと、イイタイコトがだんだんまとまってくる。まとまつてくれれば、きちんと筋道<sup>すじみち</sup>を通して語<sup>は</sup>うことができるようになる。つまり、「——というわけだから、私は……だと考へる」といえるようになる。

筋道を通すとは、意見を大声で叫ぶのではなく、自分がそう結論するにいたつた理由をちゃんと順序だてて説明していくことだ。筋道を通して書いていくからこそ、「論」文<sup>2</sup>というのである。

もちろん、筋道を通したからといって、相手がわかつてくれるかどうかはわからない。□ a □、筋道を通して書くことができれば、相手に自分の考へていることをきちんと受けとめてもらう「可能性」は、はある

かに広がる。相手が自分の結論やその理由をまっすぐに受けとめて、「ここは納得できるけれどあそこはどうなのだろう」というふうに意見を返していくとき、ほんとうにうれしいものだ。

ところで、「わかつてほしい」と思うとき、私たちはしばしば「この感情（辛さ）を受けとめてほしい」と思っている。「うんうん」とうなずいてくれる人を求めている。私たちが何かで傷ついているとき、心のケアを親しい人に求めるのはごく自然なことだ。そういうときには、自分が丸ごと受容されることが「わかつてくれた」ことなのである。しかしそのようなコミュニケーションと、論文や討論のような「筋道を通すコミュニケーション」とは、一線を画さなくてはいけない。論文を書くとき、自分の考えに **b** 的に賛成・賛同してもらうという意味での「丸ごとわかつてもらう」ということは、必ずしも必要ではないし、また求めるべきでもないだろう。実際、相手から **厳しい批判** をもらつたときでも、「まっすぐに受けとめてもらつたうえでの言葉だなあ」と思えるときには私たちはあまり傷つかないし、かえつて感謝しさえする。自分の考えの足らなかつたところを気づかせ、助けてくれたのだから。つまり論文を書く人がめざすのは、ただの賛同でも賞賛でもなくして、読み手に自分の考え（結論<sup>④</sup>及びそう考える理由）をまっすぐに受けとめてもらうことなのであり、そのことを通じて考えを進めるための助力をもらえるようにすることなのだ。

（西 研／森下育彦 「『考える』ための小論文」による。）

1 ①～④の漢字の読みを書きなさい。

2 **a** にあてはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア けれど イ つまり ウ あるいは エ なぜなら

3 **b** にあてはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 部分 イ 全面 ウ 主観 エ 客観

4 **1** これが難しい **2** とあるが、どうすることが難しいですか。二十字以内で書きなさい。

5 **1** 厲しい批判 **2** とあるが、それを書き手がどのような批判として受けとつたとき、自分の考えの足らなかつたところに気づき、感謝することができるのですか。三十字以内で書きなさい。

6 この文章において、筆者は、論文を書く目的と、目的を達成するために必要なことについて、「自分」と「他者」の二つの観点からそれぞれ述べています。筆者の主張を整理した次の表の空欄c・dにあてはまる適切な表現を、空欄cは十五字以内、空欄dは三十字以内でそれぞれ書きなさい。

目的を達成する ために必要なこ と	論文を書く目的	「自分」	「他者」
	d	「自分」をつかむため。	c
自分の結論とその理由 を順序だてて説明するこ と。			

三 次の文章を読んで、あとに問うに答えなさい。

おそれなん || きっとおそれるだろう。  
いかにして || どうして。 友どち || 友達。

鷹の羽にすむ虫ありけり。空たかくとびかけるときは、はるかに人の  
住家などをも見くだしつ。げにわれは事たれる身かな。つばさもうごか  
さで、千里の遠きに行きかよひ、雲るのよそまでもあがるめり。ことに、  
さまざまの鳥はみなおそれでにげはしる。げにもわれにかつものは大か  
たあらじなど思ひつつ、かの鷹の毛のうちに居つつ、しきりに肉レむらを  
さし、血をすひて居しが、そのやからいと1おほくなりもてゆきしにや、  
つひにその   もたふれにけり。それよりみづから出でてとびかけ  
らんと思へども、とび得ず。はしらんと思へども、すみやかならず。血  
もつき肉むらもかれぬれば、いまはいのちつなぐやうもなし。からうじ  
てまづその毛のうちをくぐり出でてはひゆけば、すずめの子の居たりけ  
り。われをおそれなんと見れば、すずめの子はしらぬさまなり。いかに  
して見つけざるかとかたはらへはひよれば、2うれしげに見て、くちば  
しさしいだして、ついばまんとす。例なきことなれば、おそろしくてに  
げ隠れぬと、かの友どちにかたりにけり。  
(「花月草紙」による。)

(注) げに || 本当に。 事たれる身 || 何の不足もない身。

雲るのよそ || 雲のかかっているかなた。

ことに || そのうえ。 肉むら || 肉。

なりもてゆきしにや || なつていつたのであるうか。  
たふれにけり || 倒れてしまった。

1   にあてはまる最も適切な語を、文章中から抜き出して書きなさい。  
2   おほくを、現代かなづかいで書きなさい。  
3   うれしげに見て とあるが、何が何をうれしげに見たのですか。次  
のアーチの中から適切なものをそれぞれ選び、その記号を書きなさい。  
ア 鷹 イ 虫 ウ さまざまの鳥 エ すずめの子

4 この文章において、虫は二つの点で勘違いをしていたと考えられま  
す。二つの勘違いを、それぞれ現代の言葉で書きなさい。